

白っていうより銀

角田光代

出典『福袋』所収
河出書房新社
400字詰原稿用紙42枚

区役所からの帰り道、駅の改札で時計を見上げると午後四時近かった。

「平日に町を歩くってなんだか新鮮だな」と、定期入れをさがしているのか鞆に手を突っ込んで堀田龍一が言う。

「六年前も平日に休みをとってここにきたね」隣に立って私は言った。あはは、と乾いた声で龍一は笑った。

定期入れの見つかった龍一と並ぶ格好で、自動改札機を通り抜ける。

「何番線？」わかっていただけれど龍一に訊いた。

「えーと」自動改札を入れてすぐにある案内板に目を這わせ、「二番線」と龍一は答える。

「じゃあ、私は三番線だから」

「うん、じゃあ」

私たちはしばらく目を合わせ、それから、握手をすることもなく札を述べあうこともなく、困ったようににやにやと笑って、互いに背を向けた。ホームへと続く階段に向かう。ふりむい

たら龍一もふりむいている気もしたが、私はふりかえらず、一段抜かしで階段を駆け上がった。六年前、やつぱり私たちは平日に仕事を休んで、この駅で降りた。婚姻届を出したのである。夏だった。いや、夏の一步手前だったか。とにかく晴れていた。区役所に続く通り沿いの木々が、暴力的に見えるほど生い茂っていた。婚姻届を出してから、通り沿いの中華料理屋でランチを食べ、それから住宅街をめちやくちやに散策した。「堀田さん」と、龍一はふざけて何度も私に呼びかけた。「堀田生実さん」と。数時間前まで私は佐藤生実だった。住宅街の角を曲がったら、ふいに広大な公園に出た。公園の真ん中を、細い川が流れていた。

そうして今日、私たちは離婚届を出しにきたのだった。梅雨明け宣言はまだ出されていないけれど、連日夏日が続いている。だから、まる六年ということになる。喧嘩別れをするのではないのだし、二人ではじめたことを二人で終わらせるのだから、と龍一が言い、それで今日、そんな必要もないのに二人で届けを出しにいったのだった。婚姻届のときと同じように、有給休暇を使って。

三番線のホームに上がる。龍一が向かった二番線のホームは隣だから、顔を上げれば龍一を見つけられたかもしれないが、私はそちらを見ず、線路をにらみつけるようにしてホームを歩いた。隣のホームに背を向けるようにして、空いたベンチに腰かけた。眼下に駅のロータリーが見える。水の出ない噴水があり、クリスマスには電飾を施される大木がある。蟬の鳴く声がある。プール帰りらしい子どもたちが、ホームの端まで駆けていく。彼らを通りすぎた瞬間、カルキのにおいが鼻をついた気がした。プール袋をふりまわしながらホームを駆ける子どもたちの後ろ姿を見送っていると、

……してください、という声が聞こえた。どうやら話しかけられているのは自分らしいと理解して、私はゆっくり視線を戻す。私の座るベンチと背中合わせに並んだベンチに、赤ん坊を

抱いた若い女がいて、私のほうに身を乗り出している。

「え、なんでしよう」私は訊いた。こめかみから汗がしたたり落ちる。

「あ、う、ほんの数分、この子を見てもらえませんか」女は言う。

「え、なんですって」私は再度訊いた。女の言っている意味が、まるでわからなかったのだ。

「すぐ戻りますから、この子を見ていてください」

私はぼかんとして女と、腕のなかの赤ん坊を交互に見た。どうやらこの女は、赤ん坊を預かってくれと言っているらしい、と理解する。

「え、だつてそんな」理解するとなおのこと驚いた。「だつてそんなの、無理ですよ」

「すぐ、すぐ、本当にすぐ戻ります。私おなかこわしてるんです」女は泣きそうな声で言う。

たしかに、私よりもずいぶんと年若く見える彼女は、紙みたいに白い顔をしている。つるんと剥き出しにした額に汗が光っている。私の流しているよりも、もつと粘ついたような汗。

「だけどそんな、赤ちゃんを、あなた」

「すぐ戻りますから、駅のトイレこわれてて、駅ビルまでいきたいんです」次第に女の言葉は怒気を含んだようになって、赤ん坊を私に押しつけてくる。「この子おとなしいから大丈夫です。五分、いえ、三分で戻ります」

ぐいぐい押しつけられる赤ん坊を思わず受け取ってしまうと、女はものすごい素早さでホームを駆けだしていった。一刻の猶予もないらしい。転げ落ちるように階段を走り下りていく若い母親の後ろ姿を、私はぼんやりと見送った。自分の腕に目を落とすと、満月みたいにまるい顔の赤ん坊が、じつと私を見ている。赤ん坊のくせに二重で、顔立ちがすっかりしている。茶色く薄い髪の毛は、なんだか駝鳥の雛を思わせた。

「こまりまちたね」話しかけてみると、どういうわけか、赤ん坊は齒のない口をぽかっとうひ

らいて、笑顔になつた。どきりとした。面倒なことを頼まれたと思つてゐるのに、なんだか花が開くその瞬間を見たみたいに、赤ん坊の笑顔は私の気持ち隅々まで晴れ晴れとさせた。

「こまりまちなね」赤ん坊の笑顔がもつと見たくて、立ちあがり体を揺らし私はもう一度言つてみた。赤ん坊はまたもや笑つた。ぎゃきや、とか細い声まで出して笑つた。「うわ」思わず私ほうなつた。参つてしまふほどかわいらしかつた。

座つていたベンチの反対側にまわると、若い母親が置いていつたらしいトートバッグがある。トートバッグの隣に座りなおした。赤ん坊は薄い黄色の服を着て、白いガーゼ状のおくるみに包まれている。ぎゃきや、と笑つたあとはまた真顔に戻り、じいーつと私を見上げている。白目が白い。澄んだ白だ。おくるみから伸びた腕の先に、ちいさなてのひらがある。驚いたことに、十本の指にはきちんと爪がある。精巧なガラス細工のように頼りない爪。つい、めずらしい野菜を眺めるように見てしまふ。抱いた片手をそろそろと外し、人差し指で頬をついてみる。パン生地を思わせるようにやわらかい。

「やーだー」私はちいさく声を出していた。赤ん坊の頬は、指を立てるとふにやりとへこみ、離すとすぐに元に戻る。そんなことをされても、赤ん坊はいつこうに泣く気配もなく、ぐずる様子もない。「かわいいー」言葉が自然に漏れてくる。

赤ん坊は幾度か抱いたことがあるが、こんなにもやわらかくあたたかいものだと思つて知る。両手を離してしまつたら、ホームに落ちて卵みたいにつぶれてしまふ気がした。夏の太陽はホームの屋根から半分ずれて、私の座るベンチに陽射しを投げかけている。蟬が鳴いてゐる。姿は見えないが、鳴き声はやけに近い。

「こまりまちなね」私は赤ん坊から顔を離したり近づけたり、顔をしかめたりべろを出してみたりしながら、赤ん坊に何度も言つてみた。そのたび赤ん坊は、にやりと笑顔を見せるのだつ

た。顔を近づけると赤ん坊は甘いにおいがした。黄色い服を着ているせいで、男の子か女の子かわからない。隣の席のトートバッグをちらりと見遣る。タオルやおしゃぶりがはみ出している。みんな黄色だ。ビニール袋に嚴重にくるまれた何かもある。赤ん坊の名前を書いた何かが入っていないかと、中身を片手でちよつとだけいじってみたが、名前のわかるようなものはないにもなかつた。

「女の子でちゆか、男の子でちゆか」赤ん坊をのせた膝を揺らしながら私は訊いてみる。もちろん赤ん坊は答えない。白目のびつくりするほど白い目で、じつと私を見ている。「お名前はなんでちゆか」片手で腹のわきをつついて訊いてみる。赤ん坊は口をぱくりと開けてのけぞる。あわてて両手でしつかりと抱く。

下り電車が走りこんできて、乗客がばらばらと降りてくる。ドアが開いた瞬間、車内の冷気が私のところまで届く。カートを押した老婆が、通りすぎざま私の腕のなかをのぞきこみ、「んまあ、かわいい赤ちゃんねえ」と感心したように言う。

自分が褒められたような誇らしい気分です、えへへ、どうも、と私は調子よく頭を下げた。「かわいいいつてほめられました」

老婆が去ってから赤ん坊に言う。丸顔の赤ん坊は、透明の涎よだれを一筋垂らし、うー、とおもちゃみたいなちいさな声を出す。

「どうしたの、何やってんの」
声に顔を上げると、龍一が立っている。

「ああ、龍ちゃん」

私は少しばかり安堵してつぶやいた。

「向こうで見てたら、いくちゃんが赤ん坊抱いてるからさ」

「ああ、まだ電車に乗っていないなかったの」

「なんだかちよつと前に人身事故があつたとかで、遅れてるみたいだけど。ところでだれの子よ、これ」

龍一は赤ん坊をのぞきこむ。赤ん坊は目を見開いて龍一を見ている。

「それがね、ここに座つてた若いおかあさんが、預かつてくれたって」

「何それ」

「ほんとなんだって。なんか、おなかこわしてゐるって」

「下痢してたつて連れてくもんじゃないの」

「そんなこと私に言われたつて困るよ、なんか駅のトイレこわれてるから、ちよつと遠くまでいくようなこと言つてたけど」

「遠くつてどこだよ」

「駅ビルでしょ、遠くつていうか、まあ駅よりは遠くつて意味」

「しかし、赤ん坊預けるなんて、最近の母親つてのは……」言いかけた龍一は、私の腕のなかの赤ん坊をじつとのぞきこむ。そろそろと人差し指をのばして、まるい頬をくにゅつと押す。

赤ん坊は身をよじらせて顔じゅうで笑つた。

「おーおーおー」

龍一は顔をほころばせ声を出す。どうやら、さつき私が抱いたのと同じ感想を抱いているらしい。

「男の子かな、女の子かな」

「な、おれにもちよつと抱かせて」

「えー、平気かなあ」

龍一が両手を差し出すので、私はこわごとと赤ん坊を手渡した。私よりははるかに慣れた仕事で、赤ん坊のわきに両手を差し入れ、タカイタカイをする。赤ん坊はまたもや、口をぽつくり開けて、きやきやきやつと、さつきよりずいぶん大きな声で笑った。

「なんか慣れてない？」と言うと、

「おれ、きららたちの面倒見てるもん」得意げに言つて龍一はタカイタカイをくりかえす。

「ああ、きらら。そつか」

龍一の実家は宮前平にあり、結婚してから正月に幾度か訪ねたことがある。龍一の兄には中学一年の息子がおり、姉には小学五年の娘と一年の息子がいる。結婚の直前に挨拶にいったとき、そういえば彼らはまだ小さい子どもだった。きらら、というきらびやかな名前は、龍一の姉の長女である。彼女の長男は世界の界に人と書いてカイトと言ひ、龍一の兄の息子は、驚いたことに路に武と書いてジムと言う。ジム・モリスンのジムなんだと、酔っぱらうと義兄はいつも言うのだつた。兄と姉の家の子どもたちがみな素つ頓狂にグロバルな名前なので、自分にも子どもができたら壮大な名前を強要されるのではないかと、つねづね私は思つていたのでつた。もちろんそれは杞憂きゆうだつたのだけれど。

「いくちゃんと結婚する前、おれ、三茶に住んでたろ、兄貴が宮前平で姉貴が驚沼つて、あいつらあのへん離れないからさあ、休みなんかしょつちゅう呼びつけられてベビースッターさせられた」

「へええ、そうだつたんだ。でももうみんな、大きいよね」

ジム・モリスンにもカイトにもきららにも、たぶんこの先会うことはないんだなあとふいに思つた。年に一度会うか会わないかの私に彼らになつていたわけではないし、私もとくにかわいがつていたわけではないのだが、そう思うと不思議なさみしさがあった。彼らは私のなか

で永遠に子どものままなのだ。

「大きいよ、ジン坊なんか声変わってるもん、ありや、ちんこに毛生えてるね」

「そうか、毛か」

龍一は自分と向き合うように赤ん坊を膝に乗せ、膝を揺らして遊んでいる。両腕を龍一に握られた赤ん坊は、不安定にゆらゆら揺れるのが楽しくて仕方ないらしく、きゃーきゃーと、甲高い声をあげて笑い出す。

「うわー、こいつまじでかわいいなあ」

「男かな、女かな」私はもう一度言ってみる。

「男じゃないのかな、ちよつと触ってみようかな」おくるみをほどきかけた龍一に、

「やめなよ、人の子どもの股間とか触るの」真顔でとがめると、

「へへへ」照れ笑いをして龍一はおくるみを着せなおす。

「白目が白っていうより銀だな」と龍一が言った。なるほど、白目は白すぎて銀に光っているみたいだった。

「何カ月かわかる？」

「うーん、三カ月か四カ月くらいかな」

「まだしゃべらないよね」

「まだまだ。寝返りもお座りもまだまだ」

「でもこっちの言っていることはわかるのかな。こんにちはー」

顔をぼつとのぞきこませると、赤ん坊ははつとした顔で私を凝視し、泣き出すかと思つたがやはり目を細めて笑う。

「人見知り、ぜんぜんしないんだね」

「きららもそうだった、だれが母親でだれが父親かって認識が遅いんじゃないかって、姉貴なんか一時期深刻に悩んだ。でも半年過ぎたら、やっぱり母親がいなくなると泣くようになって、それはそれでまた悩んじゃってさ」

「それじゃあ、私がママですよ、って言っても信じるかな」

なんとなく、本当に他意なく口をついた冗談だった。パパですよ、と龍一も調子を合わせて言い、笑いあえると思っていた。実際龍一は笑おうとしたらしく、はっ、と息を漏らし、けれど失敗したのか、そのままため息に似た吐息を漏らした。空気のずれたような沈黙があり、そのせいで私は、今の一言を深く後悔することになった。

「それにしても、この子のおかあさん、遅いね」

話題を変えるために言ったのだが、そう言ってみるとたしかに階段を駆け下りていった母親のことが気にかかり、私はそちらに首をのぼし彼女の姿をさがしてみた。数人の乗客が上がってくるが、女の姿はない。遅すぎやしないか。駅ビルのトイレが混んでいるのだろうか。それともそんなにひどい下痢なのか。隣のホームに上り電車がやってきて、ホームに音楽が鳴り響き、やがて走り去っていく。

「あれ、二番線、動いてるんじゃない」私は言った。

「そうだな」龍一も顔を上げ、走り去った電車を見送る。

「もういいよ、いつても。私ひとりでも大丈夫だから」

「いいよ、母親がくるまでいるよ。心配だろ。おれもなんだか心配だし」

「ありがとう」

「おす」

「ちよつと抱いてもいい」

私は龍一から赤ん坊を受け取った。指をしゃぶり、まっすぐに私を見ている。目がビー玉みたいだった。まだなんにも見ていない目というのはこんなにも澄んでいるのかと、あらためて思う。

龍一と結婚して二年目に、避妊もせずに性交しているのに子どもができないことに気づいた。どうしても子どもがほしかったわけではないけれど、できないとなるとなぜなのか気になった。妊娠本を買い、その本に書いてあるとおり、毎朝基礎体温を測った。排卵期に性交をするようになった。それでも私は妊娠しなかった。

私たちは次第に猛烈に子どもをほしいと思うようになった。友人の多くが子どもを産みはじめていた、というせいもあるだろうし、私の両親や龍一の両親から、子どもはまだなのかと訊かれ続けていたせいも、少しはあるだろうと思う。子どもがほしいという気分は、けれどそれよりも、もつと深い部分からくるものだった。子どもがほしかった。家族を作ってみたかった。子どもを強く望んだ私と龍一がしたことといえば、しかし専門的な診察ではなくて、迷信じみたことばかりだった。子宝の湯で有名な温泉にいったり、やはりその方面に御利益があるという神社仏閣の類に詣でたり、そんなことだ。私たちがそうしていることを知ると、私や龍一の両親や会社の親切な上司などは、漢方薬や健康食品やその他得体の知れない飲料品や錠剤などをこまめに贈ってくれるようになった。私たちは手当たり次第にそれを試し、そうして祈った。

そんなことをしているために、排卵期に行う性交は、私にとって呪術めいた儀式に思われた。それでもかまわなかった。儀式を執り行つて子どもが授かるならば、いくらでも真剣にその場にのぞめた。滑稽でも、苦痛でも。

専門医に相談にいったほうがいいと私の母親は言い、私もそう思いはじめていたのだが、そ

れには龍一が首を縦にふらなかつた。いつかできる、できるに決まつてると、頑なに言うだけだつた。午後出勤にしてもらい、龍一に黙つて産婦人科をおとずれたのは二年ほど前だ。不妊治療の結果三十八歳で子どもを授かつた上司が紹介してくれた病院だつた。卵管のつまりや癒着というケースがいちばん多い、自分もそうだったと彼女は慈悲深い顔で説明してくれた。卵管形成術ならどこも切らなくていいし、保険もきく、治療だつて一時間程度なのよ。彼女はそう言つた。

紹介された病院は、区役所みたいに素つ気なく馬鹿でかいビルだつた。四月で、敷地内に桜の木があつた。花はほとんど散つて、薄緑の葉桜になつていた。外来入り口までが果てしなく遠く感じられた。センサーが私を察知しない程度に距離をあけて、外来入り口の自動ドアの前に立ち、ガラスに映る自分自身を数秒眺めた。そうして私は逃げるようにきびすを返して駅へ向かつた。本気で子どもがほしくせに、私もまた、原因追究と問題解決を拒んだのだつた。おだやかな陽射しのなか、駅へと急ぎながら、私は検査を頑なに拒んだ龍一の気持ち痛みほどよくわかつた。こわかつたのだ。私たちのどちらかにこのような欠陥がある、そう指摘されるのはこわかつた。卵管形成術で治療できる卵管のつまりや癒着は、不妊症の原因の約三割だと事前に私は調べていた。残りの七割だつたらどうする。一時間程度の治療で終わらない問題を抱えていたらどうする。体外受精しか方法がないといわれたらどうする。保険のきかない体外受精は五十万円近くかかる。排卵誘発剤で副作用が出る場合もある。それでもさらに妊娠できなかつたら。駅へと急ぎながら、自身の臆病ぶりに驚いてもいたのだが、けれどもう一度病院に戻ることはどうしてもできなかつた。

子どもなんかいらぬ、と私たちは言うようになった。二人だけでいい、そんな夫婦はいくらだつていいし、関係になんの変わりもないと、私たちはドラマみたいなせりふを真顔で言い、

何かに追われるように休日の充実を図りはじめた。昼過ぎまで寝ていたらとテレビを見るようなことはせず、早起きして遠出をした。ローンを組んで車まで買った。子どもがいなくても充実した夫婦であると、だれにたいしてか証明するように、はっち潑刺と過ごした。犬や猫を飼おうかという話も出たのだが、子どもができないと決めてしまったみたいだからと（あるいは世間にそう見なされるからと）、結局動物を飼うことはしなかった。そうして、子どもなんかいらな
いと言いながら、私たちはもはや習慣になつてしまつた排卵期の儀式めいた性交をくりかえすのだった。

充実した夫婦の生活は私たちをへとへとに疲れさせた。一年ほどして、私たちはその疲労を実感していたのだが、やめるわけにはもはやいなくなつていた。ドライブ、小旅行、海外旅行、ホームパーティ、二カ月予約待ちのレストランでの食事。それぞれは待ち遠しく、はじめれば楽しく、心からよかつたと思え、そうしてドライブであれ旅行であれそれが終わると、不思議と同じ感想を残した。私たちのあいだには何もない、という奇妙に空疎な感想である。

何も、というのは間違いで、何かしら
在るには在るのだが、しかし子どもができないというそのために、子どもが今いないというそのために、空をつかんだような馬鹿馬鹿しさが残るのだった。

苦行のような夫婦の充実生活を、もうやめようと言いだしたのは龍一だった。もちろん龍一はそんなことは言わなかつた。好きな女ができたから、あなたと別れたいと言つた。けれどそれは、疲れたからもうやめようということと同義だった。そのとき私が思ひだしたのは高校時代の冬のマラソンのことだった。あのつらく馬鹿げたマラソンの最中、貧血を起こして倒れ、もういい、と体育教師に怒鳴られたときの、助かつた、救われた、というあの大げさな安堵感。それでも私は龍一に嫌味を言つた。その女は子どもが産めるのと言つた。何かしら嫌味を言わ

なければ、私たちが夫婦でいた、家族を作ろうとした痕跡も残らないだろうと思ったから言ったのだ。子どもは作らないと、龍一は泣きそうな声で答えた。

赤ん坊がもそもそと動き、私は我に返る。顔をゆがめた赤ん坊は、ふんふんと鼻を鳴らして泣きはじめる。

「ありやりやりやりや、泣いた」龍一が驚いて言う。

「どうしよう」私は立ち上がり、赤ん坊を揺らしてあやす。丸くふくらんだ尻をぽんぽんと軽く叩いてやる。

「泣くな、泣くな、泣くなよう」龍一も立ち上がり、赤ん坊のわき腹を指でつつく。そうされると赤ん坊は泣き顔をふつとゆるめ、老人のような笑顔を作るが、龍一がつつくのをやめるとまたも顔をゆがめて細い声で泣こうとする。その様子がおかしくて、私と龍一は声を揃えて笑った。「泣くなよう、笑え、笑え」龍一はなおも、わき腹をつつく。

「笑え、笑え」私も言いながら赤ん坊を揺すった。

笑い顔の頻度がだんだん少なくなってきた、赤ん坊の顔が赤くなり、いよいよ本格的に泣き出す様子である。私はふと思ひ出し、

「トートバッグにおしやぶりが入ってたから、とつて」龍一に言った。

龍一はまるでそれが自分の荷物であるかのように、バッグをさぐりおしやぶりを出し、赤ん坊の口にくわえさせようとする。歯のない口をもやもやと動かしながら、赤ん坊はおしやぶりをいったんくわえたものの、ぷいと吐き出してしまふ。龍一は背をかがめ、再度それを赤ん坊の口に押しこむ。

その一瞬、本当に一瞬なんだけれど、今まで私が抱えていたものが全部全部消えてしまつて、この目の前にある光景だけがほんもののような気がした。子どもを抱く私、子どもをあやす龍

一、夕暮れ間近のべたついた空気、蟬の声、ホームに響くアナウンスの声。

どうか帰ってこないでと、内側に響く叫ぶような自分の声を、他人のもののように私は訊く。おかあさん帰ってこないで、今はまだ帰ってこないで、あと十分でいい、どうか帰ってこないで。ホームを駆け下りていった見知らぬ女に、私ではないような私の声は必死に嘆願している。

「この子の母親、いくらなんでも遅いわ」

その声を消し去るために私は口を開いた。

「そうだなあ、もう三十分近くなるし」

龍一もふと顔を逸らし、ホームの時計に目を移す。

「捨て子だったりして」

口に出すと、なんだか本当にそうなんじゃないかと思つた。

「まさか、この平成のご時世に」

「でも、母親、なんだかうんと若かつたし」

「捨てるかなあ、しかもホームで」

「もし捨て子だったらどうしよう」

そうつぶやくと、龍一は私を見た。

もし捨て子だったら——もしこの子の母親がこの子を本当にいらぬと言ふのだしたら——もし私がこの子を引き受けるようなことになったら——そうしたら私たちは、もう一度やりなおせるだろうか。さつき提出した離婚届を破棄してもらつて、それが叶わないなら再度婚姻届を出して、そうしてもう一度やりなおせるだろうか。そんな子どもじみた私の空想を、龍一も抱えていることが私には理解できた。

「捨て子だったら」龍一は重々しくつぶやいて、そうして泣く赤ん坊を私から取り上げて、「警

察いかなきやなんないだろう」ふざけるような陽気な声で言つて、両腕をまつすぐあげて赤ん坊を抱えた。タカイタカイがよほど好きなのか、泣いていた赤ん坊は顔を歪ませ、笑おうか泣こうか迷っているような表情をする。「ほーら、タカイタカイ」龍一が腕を上下させると、赤ん坊は観念したように口を開けてきやーきやーと笑い出した。足をばたつかせ、おくるみがはがれる。おしゃぶりが口から落ちる。私はそれを拾つてトートバッグに戻した。

「ねえ、私にも抱かせて」

泣きやんだ赤ん坊を、私はおくるみごともう一度抱く。両腕にすっぽりとおさまる。ふわふわと頼りなくやわらかくて、びつくりするほどあたたかい。薄い頭髪に顔を近づけると、あいかわらず甘いにおいがする。頬も額も、すべらかにやわらかい。

子どもではなかつたんだろうと唐突に私は思う。私と龍一の関係をこわしたのは、赤ん坊の不在ではなかつたんだろう。この、ふわふわした、落とせばこわれてしまうようなものは、私と龍一のあいだに生じなかつたのではなくて、たしかに存在していたのだ、あの住宅街をめちやくちやに歩いた夏の日には、しっかりとつないだ、汗で湿った手のなかに、すでに存在していた。

私と龍一は何も言わずベンチに腰を下ろした。赤ん坊もじつと黙りこんでいる。蟬の声がい出したように聞こえた。太陽はさらに傾いている。腕の内側と腹と太股、赤ん坊の輪郭だけがびつくりするほど熱い。Tシャツは汗で湿つて体に貼りつく。膝の裏から汗が流れ落ちる。ふくらはぎをくすぐるように通過して汗はサンダルにしみこむ。夏の暑さは不快なのに、赤ん坊の熱さが不快ではないのが不思議だった。

「赤ん坊つてやわらかい」私はつぶやいた。うん、と龍一は低く返答してうなづく。

「これくらいやわらかいだろうと思つている三倍、やわらかい」うん、と今度は声を出さずに

うなずいた。

私が言葉を切ると龍一も何も言わない。私たちは前を向いて座っていた。隣のホームには下り電車が走りこんできて乗客を降ろす。みなそれぞれの速度で階段に向かう。蟬は鳴きやみ、また鳴きだす。赤ん坊は身動きひとつせず、私たちみたいに隣のホームを眺めている。

この人といつしよにいようと私たちそれぞれが決めたとき、私たちの意志と決意とにかかわらず、この赤ん坊のようにふわふわしてあたたかいものは、私たちのあいだに生まれたのだ。それは赤ん坊とおんなじようにゆつくりと成長し、ぐれたり更生したりしながらさらに成長し、あるとき成長をやめ、ゆつくりと老いはじめる。けれど私たちはたぶん、その成長も待たずそれをどこかに捨て置いてしまったのだ。夏のさなかに赤ん坊をこうして放置するように、こっそりとどこかに置いて、そうして二人で逃げたのだ。充実した夫婦生活は生まれなかった子どもの代用ではない、捨てて逃げたことへの罪悪感だ、ねえそうだよ龍一。私は赤ん坊を抱いたまま隣に座る男に話しかけた。心のなかだけで。

蟬の声はやけにやかましいと思つたら、赤ん坊の泣く声が混じっていた。さつきまであんなに上機嫌で、泣くときもか細い声しか出さなかつた赤ん坊は、私の膝の上で身動きせず、顔を真つ赤にして泣き叫んでいる。

「この泣きかたは、あれだな、おむつだな」

訳知り顔で龍一が言う。

「じゃあおむつ替えてよ」

若い母親が置いていったトートバッグを引き寄せる。勝手に手をつつこんでなかをさぐる。ジップロックに入った哺乳瓶、タオル、ミニアルバム、アヒルのおもちや、インスタントカメラ、そんなものがごちゃごちゃと入っているバッグのなかに、紙おむつも数枚入っていた。そ

れをひとつ取りだし龍一に渡す。龍一は、私から赤ん坊を取り上げ、器用にベンチに寝かせる
と、向かい側にしゃがみこみ、おくるみを脱がす。黄色いベビー服の股の部分にはボタンがつ
いている。全部脱がさなくてもおむつを替えられるのかと、そんなことに妙に感心した。龍一
は慣れた仕草でおむつをはずしていく。ペろり、と果物の皮を剥くようにしておむつをはがす
と、ちいさなちんちんがあらわれた。

「あ、男だった」

私と龍一は声を揃えた。

「あれがないの、ほらお尻ふき」

龍一がせかすように言う。

「お尻ふきつて何よ、トイレットペーパー？」

「ちやうちやう、ウエットティッシュみたいなの」

私は再度トートバッグに手をつっこむ。四角いプラスチックの箱がある。これ？ と取り出
すと、そうだと龍一はうなずき、真顔で湿ったティッシュを一枚取り出す。片手で両足を持ち
上げ、ていねいに尻とちんちんの周辺をふいている。つんととがったような、それでいて甘く
さいようなにおいが鼻をつく。電車から降りてきた女子高生が二人、私たちの手元をのぞきこ
み「いやーん」と声を出し、弾けたように笑いながら通りすぎていく。

「きゃー、ごめんなさいー」

遠くから大声がして、ふりむくと、さっきの母親がこちらに走ってくるのが見えた。なんに
も持たずに走り去ったはずの彼女は、紙袋やらビニール袋やら、両手にどっさり荷物を抱えて
いる。

「あ、あの人、帰ってきた」

私はぼんやりした声を出した。

「え」

赤ん坊の両足を持ち上げたまま、龍一は私の目線の先を追う。

ばたばたと走ってきた母親は、手にしていた荷物をホームに投げ出すと、ベンチに置いたおむつを手にし、龍一を押しつけるようにしてしゃがみこみ、赤ん坊のおむつを替えている。母親が投げ出した荷物を私はぼんやり眺めた。肉屋の袋がありブティックらしい名の書かれた紙袋があり、葱とごぼうの飛び出したビニール袋があり化粧品会社の紙袋があり、洋菓子が入っているらしい洒落たビニール袋があった。

「あんた、無責任だな」のつそりと立ち上がりながら龍一がつぶやいた。「知らない人に預けて何十分も帰ってこないなんて、信じらんねえよ。捨て子かと思つたよ。あんた、おれたちが悪い人だつたらどうすんの、赤ん坊どつかに連れてつて何かしたらどうすんの、わかつてんのそういうこと」龍一は次第に声をあららげ、すぐむように言う。この場にはそぐわないすみかたで、悪さを見とがめられ逆ギレする子どもみたいに見えなくもなかった。けれど母親はまったく頓着せず、

「はい、おむつきれいきれいしましたよ、気持ちいいねえ、泣いたの、泣いたの、たーくん」
甘い声で赤ん坊に話しかけ、無造作に赤ん坊を抱き上げた。母親の腕のなかで、赤ん坊はまだ泣いている。鼻水が流れ、涎がしたり落ちる。

「心配したんですよ、本当に」私も言った。

「ごめんなさい、駅ビルのトイレは掃除中で、それであつちのアーケードのトイレまで走つたんですけどー、おなか痛くて立ち上がれなくなっちゃつてー」母親は、まったく悪気のないほがらかな声で私に言う。彼女の足元に落ちた荷物をちらりと見遣ると、私の視線に気づいた

彼女はぼつが悪そうに「えへへ」と笑った。

四番線に下り電車が走りこんでくる。彼女は片手で赤ん坊を抱き、片手でばらまいた荷物をかきあつめ、

「どうもありがとうございますー、ほんと、助かつちやいましたー」

邪気のない笑顔で私にひとつ頭を下げて、電車に乗りこもうとする。彼女が置き忘れたトートバッグを、あわてて私は押しつけた。すさまじい荷物を抱えた彼女が乗りこむと、電車のドアが閉まる。窓の向こうで彼女はもう一度頭を下げ、まだ泣いている赤ん坊の腕を持ち上げ、こちらに向かつてバイバイとふつて見せた。おもちゃみたいな爪のついたちいさな手のひらが左右に揺れる。私の横に立つ龍一は、つられたようにちいさく手をふっていた。赤ん坊はあつという間に遠ざかる。

「事件にならなくてよかった。しかしとんでもねえ馬鹿親だな」龍一がため息をついて言う。

「なんか、ごめんね、つきあわせちゃったね」

「べつにいいよ。今日は休みにしたんだから。それじゃ、おれはいくかな……あ」

龍一の目の先を見ると、ベンチにころりとひとつ、折り畳まれた使用済みおむつが落ちていた。私と龍一は、そこにぼつんとある赤ん坊のなごりを見つめる。

「つたくしょうがねえな」

龍一がつぶやき、それを手にして「じゃあな」と私に言った。

「それ」龍一の手元を見て言うと、

「捨てとく」とつぶやいて、私に背を向けた。

「じゃあ」ゆつくりと遠ざかっていく龍一の後ろ姿に向かって私は言った。「ありがとう」その声が届いたか届かなかったか、龍一がふりかえらないのでわからなかった。使用済みおむつを

片手に持った龍一は、階段を下りていく。尻、腰、肩胛骨^{けんこうこつ}、肩、首と続いて見えなくなり、やがて頭も髪の毛も見えなくなつた。

私ははじめに座っていたベンチに腰かけた。龍一がどこにおむつを捨てるのか見てみたかつたけれど、彼があらわれるホームに背を向けて座っていた。ホームより低い位置にある駅のロータリーは、いろいろなものの輪郭が淡く金色に染まりはじめていた。ビルや木々やバスの輪郭が。

アナウンスに続いて黄色い電車が走りこんできて、私はもう少しその場に座つたままでもいいと思つただけれど、ドアが閉まるのを知らせる音楽が鳴りはじめたところで、座つたままではないと思ひながらも電車で飛び乗っていた。車内は冷房が寒いくらいにきいていた。空いている席に座る。電車が動きはじめ、肩越しにそつとふりかえると、向かいのホームに突つ立っている龍一が見えた気がした。おむつを片手に持つたままの龍一が。

腕のなかには赤ん坊の余韻があつた。ふわふわとそれはまだあたたかかつた。危険ですので駆けこみ乗車はおやめくださいとアナウンスがあり、向かいに座つた中年サラリーマンがざろりと私をにらんだ。